

一般財団法人 東京私立中学高等学校協会  
東京私学教育研究所  
(共催・公益財団法人 東京都私学財団)

文系教科研究会  
(国語) ニュース

第36号

一般財団法人 東京私立中学高等学校協会  
東京私学教育研究所

(共催)公益財団法人 東京私学財団

## 文系教科研究会(国語) ニュース

第 36 号  
発行会  
2018. 3. 研究  
東京私学教育研究所  
千代田区北九段1-25  
私学会別館  
Tel - 3263 - 0544

### 文系教科研究会委員長あいさつ

#### 『カップラーメンとグローバル』

大森学園高等学校長 畑澤 正一

文系教科研究会は私学の先生が講演会や研究発表会に参加することにより、多くの情報を広く収集し、授業力の向上と教師間の連携に資することを願うものです。

師走、オーストラリアからホームステイにきた生徒と、本校生徒が横浜の「カップヌードルミュージアム」でのプログラムに参加しました。ペアでの「チキンラーメン」づくりはことばの壁を越え、和気あいあいとあたかも旧知の友人のようでした。日清食品創業者安藤氏が1958年世界初のインスタントラーメン「チキンラーメン」を創造と忍耐により発明したとの説明を聞きながら、想いは学生時代に。私が大学一年生の時カップヌードルが鳴り物入りで発売されました。71年スーパーマーケットの棚にズラーッと並べられたカップヌードルを繁々と見つめた後、手は下段に置かれた6ヶ入りの袋めんにも。両者とも価格は100円だったと記憶しています。

した。こうして78年の第二次オイルショックへと続きます。そして現在日本は、明治維新、戦後復興に匹敵するといわれる「グローバル化」という大きなうねりの只中にいます。このような中、日本の技術や経済活動が世界に貢献するとともに、日本の文化やこころ、ことばが置き去られることの無いように学校教育の役割が今後益々大きなものとなることは疑う余地はありません。

#### ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

#### 「山月記」論をつくらう!

〜アクティブ・ラーニング実践

ワークシヨップ

中央大学杉並高等学校

国語科 齋藤

祐先生

※以下の文章は、2016年6月24日にアルカディア市ヶ谷で行われた、私立中高協会文系教科研究会【国語】「研修会」において、筆者が発表した授業の実践報告の講演録に加筆・修正を施したものです。

#### はじめに「アクティブ・ラーニング再考」

2016年3月に、かえつ有明中

学校・高等学校で行われた「授業研究会」にて、芥川龍之介「羅生門」の授業実践の試みを発表する機会を頂きました。「アクティブ・ラーニングで『羅生門』」と題した報告の際、お集まりの方々から寄せられたさまざまな声を聞くにつれ、今まさに、アクティブ・ラーニングを教育現場でどうやって実践していくべきなのかについて大変関心が高いということを実感しました。①

2017年度末に発表される高等学校の新学習指導要領には、アクティブ・ラーニングという表現が「主体的・対話的で深い学び」という学びに包括されていく模様です。②しかし、たとえアクティブ・ラーニングという表現が目立たなくなっただとしても、この流れ自体は不可逆だと考えられます。例えば、新しい学習指導要領の作成段階でさまざまな委員を務められた奈須正裕氏は、アクティブ・ラーニングとは特定の授業形態ではなく、学びのあり方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことだと述べています。③この考えは2016年末に出された、中央教育審議会答申の中で次のように言及されています。

「アクティブ・ラーニング」については、子供たちの「主体的・対話的で深い学び」を実現するために共

有すべき授業改善の視点として、その位置付けを明確にすることとした。<sup>④</sup>

すなわち「アクティブ・ラーニング」とは「授業改善の視点」であり、「主体的・対話的で深い学び」を目指すために再概念化されたのだ、というわけです。さらに、京都大学の溝上慎一氏も、政府の施策文書や学術的な理論を、概念化・理論化された「グランドセオリー (grand theory)」であるとした上で、これからの学校現場に求められる作業は、理論と実践とを往還しながら「現場の理論」＝「グラウンディッドセオリー (grounded theory)」を構築することだと述べています。

答申が出て、学習指導要領案も出て、いま学校現場に求められる作業は、理論を学び、それに基づいて教育実践を創り出し、理論と実践とを往還し、そうしてローカルな文脈をふまえた「現場の理論」を構築することである。<sup>⑤</sup>

私自身、すでに20年にわたって教壇に立ち続けていますが、もはや50分間講義をするという一方向型の授業スタイルでは、とても授業を成立させることはできないと実感しています。アクティブ・ラーニング

というのが、前出の答申における別の箇所で謳われている通り、「人間の生涯にわたって続く「学び」という営みの本質を捉えながら、教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくこと」(49頁)であるとするなら、生徒の主体的な姿勢をいつでも引き出すことができる授業、学ぶことの素晴らしさを少しでも伝えることのできる授業を、今こそ目指していくべきだと思われます。

### 「網羅」の呪縛

アクティブ・ラーニングを実践してみているのは、私たち教員が「網羅の呪縛」から解き放たれることがいかに難しいか、ということだと思います。授業を通じて、私たちはどうしても「あらゆること」を語りたがります。今回の教材で言えば、国語科の教員の多くが『山月記』にまつわるさまざまな知識を、ついついとめどなく語ってしまう。教育現場には、『山月記』を教室で扱うなら、あれもこれも教えたいという方がたくさんいると思います。しかし、ここに罠があります。

「網羅」された教員の語りは、ほとんど生徒には届いていません。それでも、私たちはできるかぎり全て

を与えようとする。結果、教員が「十(じゅう)」を伝えたくもりになつていても、生徒の理解のうえで「一(いち)」も伝わっていない場合が少なくないのです。ところが、アクティブ・ラーニングにおいては、教員が何を伝えたく、ではなく、生徒が何を受け取ったのか、が問われま

す。私たち教員が知っていることをできる限りたくさん生徒に伝えようとする授業は、結局のところ、教員ベースでつくられた授業です。そうではなく、あくまで生徒ベースで授業を組み立てるのがアクティブ・ラーニングなのです。我々が持っているものを全て与えるのではなく、まずは生徒が何を知っているのか、そこから何ができるようにしたいのか、ということから始めたいと思います。

では授業計画をご覧ください。

### 授業計画

- ① 作品を知る (2h)
- ② 「揺さぶり」をもたらす「問い」で作品を精読する (5h)
- ③ グループワークで解釈を行い、その内容をひとりで発表する (6h)

単元の全体は3ステップの構成になっています。作品を知るところから始め、「揺さぶり」をもたらす「問い」で作品を精読し、グループ

ワークで解釈を行い、その内容をひとりで発表します。発表時間は3分間です。

### ① 作品を知る——音読から通読へ

まずは「① 作品を知る」ために、冒頭場面の音読を生徒同士のパアで行います。「隴西の李徴は博學才穎、天寶の末年、若くして名を虎榜に連ね」から、「その後李徴がどうなったかを知る者は誰もなかった。」まで、です。この際、生徒には次のように指示を出します。

「今から1回だけ冒頭の場面を読み上げます。後から皆さんに読んでもらいますので、読み方がわからない言葉を全てチェックしてください。」

こうすると、教室内の緊張感が一気に高まります。メモが取れるよう、ゆっくりとしたスピードで範読した後は、ペアの生徒同士で読めない漢字のチェックをします。もはや大きな教室の中で、1人だけ立ち上がって朗々と教科書を音読できるような生徒はいません。しかし、2人組のペアならば生徒たちは声が出せます。一方、生徒自身に読ませてみて初めてわかることもたくさんあります。「羅生門」の実践報告の際にも申し上げましたが、「下人」

を「げにん」と読めない生徒がいます。「雨やみ」を「あめやみ」と読んでしまう生徒がいます。私たちはまず、目の前の生徒の現状がどのようなかを把握するところから、授業を組み立て直す必要があるのです。

冒頭の音読の後は、作品の最後まで黙読させます。その上で、『山月記』はどんな物語ですか？と問いかけてみました。すると、ある生徒の読み取りは、次のようなものでした。

「人が虎になる話。」

これだけです。正直に申し上げて、この回答にはかなり落胆させられました。高校2年生の段階で『山月記』を読んで、1回目の読み取りが「人が虎になる話。」の1行で終わりというのは、大変残念な話です。しかし、仕方がありません。この生徒はこのように受け取ったのです。また、別の生徒はこんな振り返りを残しました。

「昔はエリートだった李徴が詩業で苦しみ、家族のために働いていたが、突然、ある夜「呼ばれた」気がして家を飛び出したら虎になっていた。その後、旧友と再会し、詩をつづってもらい、帰っていったとい

う話。フィクション。」

この最後の「フィクション。」というのでもという意味なのかまったくわからないのですが、ひとまずは『山月記』を荒唐無稽な話として受け取ったのだ、ということにはわかりません。それから、よく見るとこの生徒は「李徴」と書けていません。「李徴」の「徴」が「微」になっています。物語に登場する「袁愔」という人名も、書けない生徒が一定数います。「袁愔」の「愔」の「んべん」がどうしても「りっしんべん」になってしまふ。「りっしんべん」だと「悲愔」の「愔」です。このあたりは、毎回の記述を確認する中で、修正が必要な箇所です。しかし、こんな振り返りもありました。

「失って気づくものがある、とよく言うが、この物語で李徴が失ったものは「人としての日々」である。だが、虎になってしまったことで、改めて自分を見つめ直すことができたという点では、得るものもあったのだと思う。虎になっても冷静に自分を分析できた李徴はやはりすごい人物なのだと思った。」（下線引用者、以下同様）

上記の生徒の記述を読んでようやく、私自身が今回の単元の見直し

を持つことができました。袁愔という聞き手を得て、誰にも語ったことのない己のありようを告白していく李徴が、自分の失われた過去を語っていく中で自分自身の認識が変わっていく。それと同時に、いたい彼が何を手に入れる物語なのか、ということに焦点を当てて授業を展開してみようと考えるに至ったのです。

### 普段の授業風景

ここで、私の普段の授業風景についてお話ししておきます。写真をご覧ください。

### 授業風景



ちようど今日の会場のような、

テーブルを囲む形態で授業を進めています。いろいろ試した結果、グループワークは3名ないし4名で行うのが適切なサイズなのだと確信するに至りました。なぜなら、2人のペアワークは、生徒同士の組み合わせがうまくいかなかった場合に機能不全に陥ってしまいます。また、5人以上のグループにしてしまうと、グループの中で話題が分かれてしまうので、グループとしてのまとまりが生まれず、協働的な作業になりません。それゆえ、グループワークは3名ないし4名で行うべきでしょう。

ちなみに、生徒たちの手元にはノートがありません。板書を写すだけのノートには何の意味もありませんので、数年前にやめてしまいました。その代わり、毎回「ふりかえりシート」を書かせています。授業中にメモが必要な場合は、このシートの裏に書かせます。そうすると、この時間の記述を全て、授業のあとに教員が確認できます。スキヤナーに取り込んで保存するのも簡単です。

基本的に、授業は50分1コマです。最初の10分で前回の振り返りと今日の目標（めあて）を設定し、その後は30分程度のグループワークになります。そして、毎回必ず最後の10分を使って振り返りを行います。

す。アクティブ・ラーニングをいきなり目指すことが難しい場合は、最後の振り返りだけでもやってみてください。書く時間は、5分でも10分でもかまいません。おそらく、出てきたものを見て先生方はびっくりすると思います。そこには、今日の授業の、生徒目線での受け止め方があらゆる面において露わになっているからです。

最後の10分を振り返りに充てるうえで、私たち教員はこう考えがちです。その10分があれば、自分が話した方が生徒に伝えられるものは多いのではないかと。しかし、違います。生徒に振り返りを書かせ、かつ次の授業の冒頭にそれを生徒に読ませることで、生徒にとっての授業が「点」ではなく「線」としてつながっていきます。それは、隙間を惜しんで語られる教員の話を書くことよりも、ずっと価値のあることなのです。

お恥ずかしい話ではありませんが、かつての私の授業の様子を紹介します。チャイムが鳴ったら教室に行つて、起立・礼が終わった後、最前列に座っている生徒に歩み寄つて、ちよつとノートを見せてね、と話しかけます。そのノートの記述を見て、前回の授業の流れを把握したから、「じゃあ、今日は○○から始めるよー。」と宣言し、その続きを黒

板で整理しながら、生徒とやりとりしながら読みを進めていく。そうこうしているうちに、予定通りには授業が進まないままチャイムが鳴つて、その日の授業は終わりです。

皆さんお気づきだと思いますが、こんな授業をしていてはダメです。このような授業スタイルでは、この時間が生徒にとって一体どんな時間だったか、生徒がこの時間を通じて何を獲得できたのかを、つかまえるようがありません。毎回の授業が教員のペースで展開されれば、当然、生徒は飽きてきます。徐々にダレてきます。しまいには、寝てしまいきます。そして、試験前になると聞いてくるのです。「先生、試験には何が出るんですか?」と。

この不毛なやりとりから脱却しなければなりません。教員が言ったことをかたっぱしから暗記すれば試験は乗り切れる、と思つている生徒たちを、きちんと裏切つてあげなければなりません。

いま私は生徒たちに、手を使つて考えよう、と繰り返し言つています。頭の中に、きれいな形の文章がそのまま入っていることなどありません。書き出してはじめて、自分の頭の中が可視化されるのです。消しゴムをしまつて、思念として浮かんだあらゆることを書き出すところから、授業を始めましょう。生徒

自身が、自分の頭を使つて授業に臨み、自分の手で思考を書き出し、そのプロセスを軌跡として残しておくことが、次の授業につながっていきます。教員ペースではない、生徒ペースの授業であることが生徒自身に理解されれば、生徒はちゃんとついてきます。そのためにこそ、この時間のリフレクション(振り返り)が必要なのです。

### 振り返りの価値

生徒がその日の授業の振り返りを記した「ふりかえりシート」は、授業の最後に全員分を集めます。教員は全員分に目を通しながら、気になるところに下線をひいて最後に◎をつけて返却します。次時、返却するときは、グループワークを一緒にやっている生徒同士で回し読みをさせます。お互いがどのような振り返りを書いたのかを共有させることで、今日の現代文の授業に対する「構え」が出来上がります。「ふりかえりシート」は、教員と生徒とのコミュニケーションツールなのではなく、生徒自身が前回の授業と今回の授業をつなぐための思考ツールなのです。

実際、これまで書いた「ふりかえりシート」を活用して今日の課題に答えることができた、という生徒がいます。言い方を変えれば、積み重な

なった「ふりかえりシート」はそのまま、生徒たちにとってのラーニング・ポートフォリオになっていると言えます。

生徒たちの「ふりかえりシート」を読むことで、教員にとっても授業の進め方の振り返りができます。そのクラスの次の時間をどのようにデザインすればいいのかというヒントを得ることもできます。

振り返りの中に生徒からの質問があれば、それを次の時間の冒頭で解説をします。これはやってみて気がついたことなのですが、解説の内容自体は、以前の講義スタイルで行っていた授業のときと中身が変わっていません。ところが、話す順番が違っています。以前は、生徒たちにしてみれば何の疑問も抱いていないところに教員が先回りして説明を施していました。いまはそうではなく、生徒が何らかの疑問に気がついた段階で、教員が後から追いかけて説明をしています。生徒たちはその解説を一生懸命に聴きます。その結果、聴いた解説を踏まえて今日の課題へとスムーズに移つていくことができるのです。前の時間を取りこぼしたことを、生徒が「ふりかえりシート」で教員に伝えてくれます。生徒が授業を通じてモヤモヤした状態になったところでその声を拾い、必要な解説を施す、という

ところがポイントです。

## ②「揺さぶり」をもたらず「問い」で作品を精読する

次に、教科書の「学習の手引き」を使い、場面を区切って精読していきます。「学習の手引き」そのままばかりではありませんが、ちょっとしたアレンジを加えるだけで、アクティブ・ラーニングにふさわしい問いかけ（トリガー・クエスチョン）に変えることができます。今回、最初に提示した「問い」は、次のようなものでした。

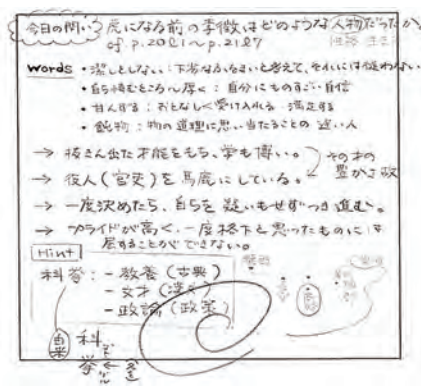
Q. 虎になる前の李徴はどのような人物だったか？

これは李徴の告白が始まる前までのまとめで、「学習の手引き」そのままです。この日の授業後、生徒たちはこんな振り返りを残しています。

今日は虎になる前の李徴の様子から李徴がどのような人物だったのかを考えた。私は李徴が自分にストイックな人物だと思った。しかし後に自分を追い込みすぎてしまったことで虎になってしまったので人と交わりを断っていきなかつたら人間のままであったかもしれない。最後まで通読したうえで冒頭の

場面を整理していくと、生徒の思考には出来事の因果関係を結ぼうとする姿勢が見え始めます。もう1人、見てみましょう。

生徒の振り返り



この生徒は、物語の舞台を地図で整理しながら振り返りをまとめています。この生徒の振り返りには、次のような記述がありました。

李徴の人物像に迫り、彼がいか自信家でありプライドが高かったのがわかった。なぜ才あつた彼が、そこまで高慢な思想を持っていたのかがわかりにくい。

「なぜ才あつた彼が、そこまで高慢な思想を持っていたのか」。この

ように、振り返りで新たな疑問が出てくる場合もあります。「読む」という行為は「問い」を生み出す行為です。微細な部分に注目することで、はじめ、初読では読み飛ばしていた語句に注意が向き始めます。叙述の微細な「部分」にこだわることで、作品全体の意味が変容を遂げていくのです。

脚問をアレンジしたトリガー・クエスチョンも考えました。李徴が自分の過去を語りだしていく一人称に注目すると、当初は「自分」であったものが、だんだん「おれ」になっていくことに気づきます。しかも、告白の途中で徐々に「おれ」が前面に出てくるのです。ここに注目して次のように尋ねます。

Q. 「自分」と「おれ」とは何が違うのか？

まずは、該当場面の「おれ」に○、「自分」に□をつけさせます。生徒たちは自分の教科書に印をつけていく中で、確かに一人称の表記が変わっていることに気がつきます。そこに重ねて、こう尋ねます。

Q. 「おれはしあわせになれるだろう」とはどういうことか？

三省堂の教科書だとここは脚問

で処理してあるところですが「おれはしあわせになれるだろう」と言っているのはなぜか？と問うてしまうと、本文を読めばその場で答えられる問いになってしまいます。そうではなく「どういうことか？」と聞くことで、生徒は李徴にとつての「しあわせ」の意味を考え出します。この問いに答えるためには、その後を丁寧に読まなければいけなくなるのです。その結果出てきた生徒の解答は次のようなものでした。

人間である心が消えてしまえば、虎としての自己の行いを見ることがなくなり「しあわせ」だが、かつての日のように人語を操り、複雑な思考に堪え、経書の章句をそらんずることができなくなるため、本心では「ふしあわせ」であるということ。

これは、私が想定していた模範解答です。「おれ」が「しあわせ」になるためには「自分」が「ふしあわせ」にならない。この文脈における「しあわせ」は、言っていることと持っていることが全然違う。しかし、別の生徒はこんなことをこの日の振り返りに書いています。

今日は李徴と袁悛の対話に注目して読み進めた。李徴の「おれ」と



「自分」の使いわけについて、文章を読んですぐ分かる違いについては見つけることができたのだが、それを深く読み取って異なる違いを見つけることはできなかった。「おれはしあわせになれるだろう」とはどういうことか？ に関しては、全くといっていいほど考えが浮かばず、機能しなかった。

この振り返りを読んで、生徒の現状が「おれ」と「自分」の違いを説明するところまではできるけれども、それが「しあわせ」の意味を論ずるところまでは届いていない、ということがわかりました。そこで次の時間に、板書を使って授業の冒頭で解説を行いました。その解説とは次のようなものです。

「自分」と「おれ」図解



李徴は「自分」と「おれ」とに引き裂かれているよね、というのを黒板上に図示した上で、「自分」という一人称は「人間」の方に寄っているのに対して、「おれ」は「獣」の方に寄っている、と整理します。また、別の生徒が振り返りの中で、「理性」と「本能」という概念を提示していましたので、それも拾い上げて「自分」と「おれ」にそれぞれ「理性」と「本能」を振り分けてあります。右側の「おれ」が「しあわせ」になるということは、左側にある「自分」

が消えなければならぬ。このように整理した上で一度、「おれはしあわせになれるだろう」の意味を手元でまとめてごらん、と返してあげます。そうすると、その日の振り返りで「そうか。良かった！」と返してくる生徒がたくさんいました。

生徒が疑問を持ったところで初めて教員が介入して解説を行う、この逆転のプロセスが大切なのだと思います。生徒のもやもやした感じを、教員が後から追いかけていくのが基本です。こちらが先回りしてしまっているのではなく、彼らが「なんだろう？」と思ったところでようやく、私たちが自分の知識の引き出しを開陳していくのです。

手引きを続けていきます。李徴の告白の2つ目になります。

Q. 李徴はなぜ虎になったのか？

ここは、「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」が出てくるところです。手引きでは「李徴が自分で虎になった理由を説明するところについて整理してみよう」となっています。生徒たちのこの日の振り返りは、次のようなものでした。

李徴は、自身の臆病な自尊心と尊大な羞恥心を人と遠ざかることで飼いたい程度にすぎず、外見まで

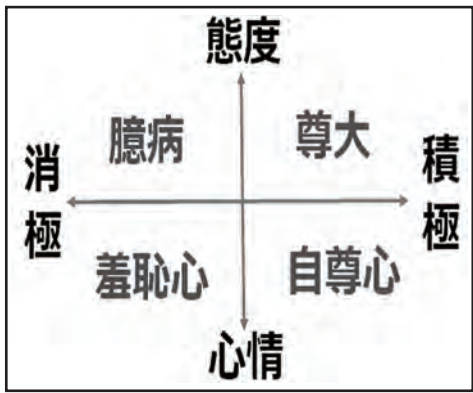
変えてしまった。

これは手引きレベルで言えば模範解答です。しかしこの日の振り返りにも、「全然わからない」という声がありました。

自尊心と羞恥心を捉えてそれを告白として表出している。尊大と羞恥心とか、態度と心情が反対の意味だったから、全然読み取れなかった。

正直、ここまでわかっていればもう既に理解しているも同然のはずなのですが、ここで、この疑問を使って解説しようと思ひ、次の時間の冒頭で再び、解説を施しました。

「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」図解



まず、縦軸に態度と心情を取りま  
す。次に、横軸を消極と積極にして、「臆病」「尊大」「羞恥心」「自尊心」それぞれの言葉をはめると、普通に考えれば、まずは自尊心に支えられて尊大な態度が出てくる、それから羞恥心があるから臆病な態度になる、と整理できます。しかし、李徴の場合はどうなっているだろうというところ、李徴の場合は、これが交錯していることに気がつきます。

羞恥心が心情の側にあるのに態度が尊大になる、自尊心が心情の側にあるのに態度が臆病になる。これらがいろんな形で混ざり合って、李徴という人物を形づくっている。感情がさまざまな感情の複合体（コンプレックス）としてある、ということを示して、そのまま投げ返します。

そうすると、さらにグループで様々な議論を交わした上で、この日の振り返りには次のようなものが出てきました。

人間の心の李徴は虎になった理由を考え、虎の心の李徴は人間だった理由を考えているので、2つは完全な別物と考えることができる。

李徴自身が、なぜ虎になったのかわかっていないまま生きている。そもそも、闇の中から声が聞こえたの

が李徴しかいなかったから、闇の声はもしかしたら李徴の中に眠っていた何かが目覚めた声だったのではないのか。

こうしてみると、徐々に『山月記』の世界観が生徒たちの中で深まっていくことがわかります。トリガー・クエスチョンを用意して投げたら、あとは彼らが考えるのを待ちます。さらには、その日の振り返りが出てきたものを拾い上げて、次の授業で展開していきます。そうすると、生徒たちの思考の中に、今日の授業でいったい何を学んだのかということが、言葉としての形を伴って出てくるようになります。もちろんもともと大切なのは、読めば読むほど、わからない点が出てくることです。こうして、『山月記』冒頭の授業から記述と振り返りを積み重ねていくことよって生徒たちの思考が深化し、物語の意味を具体的な相貌としてつかまえようとする意識が立ち上がっていくのです。

### 今回の失敗

ではここで、今回の失敗を紹介いたします。試行錯誤でやっていますので、毎回必ず大きな失敗をしています。今回の失敗はこちらです。

Q. 5 W 1 H であらすじをまとめよ

う。

実はこれ、『羅生門』の時に一度試しているやり方です。『羅生門』は、平安末期、暮れ方の羅生門で、1人の下人が、老婆の着物を、自分が生き延びるために、剥ぎ取った、という物語文を作成していました。このような物語文を作成することで、下人が盗人になる決心を固めていく心理の変化を追いかけようという、授業の中心をなす読みの方向性が示されていました。しかし、『山月記』もこの形でいけるのではないかと思ったのが間違いでした。

今回、私が授業前に作成した『山月記』の物語文は次のようなものです。

When? : 中国・唐の時代 (李徴失踪の翌年)  
Where? : 商於近くの林の中で  
Who? : 虎になった李徴が  
What? : 失踪からこれまでの経緯を  
Why? : 人間であった自分と決別する  
ために

How? : 袁倓に語った。

中国・唐の時代、商於近くの林の中で、虎になった李徴が、失踪からこれまでの経緯を、人間であった自分と決別するために、袁倓に語った――。ここまで準備して、私は教

室に向かいました。教室の雰囲気を見て、いきなりすべてを埋めるのは難しそうだと判断したので、試しに「Who? (誰が?)」と、「How? (どのよう?)」だけを板書し、その間を埋めてみよう! と生徒に投げかけました。

そして「この物語はいつの話ですか (When?)」と聞き、出てきた生徒の回答は、なんと「天宝の末年 (―) 」というものでした。皆さんご存知の通り「天宝の末年」は、李徴が科挙に合格し、その名を「虎榜に連ね」た年であって、物語の舞台としては不適當です。語られている現在から考えれば、挿入されたエピソードに付随した年号に過ぎませんから。ただ、文脈が読めていないことをふまえて推測すれば、確かに年号らしきものが書いてあるのはここだけです。気をとりなおして、では、「物語の舞台はどこだろう (Where?)」と尋ねました。すると、生徒から返ってきたのは次のような回答でした。「先生、それが地名だからわかりません。――確かにそうです。『山月記』の冒頭を初めて読んだ人にとって、それが名前前でそれが試験でそれが地名なのは、皆目わからないのです。」

さらに気を取り直して「李徴はいったいどんなことを語ったのか (What?)」と尋ねました。何人かに



同じことを繰り返し尋ねましたが、もはや何も返ってきませんでした。半ば諦めながら、では「どうして語ろうと思ったのだろう (Why)?」とも尋ねてみましたが、ボタンの掛け違いはすでに修正の施しようがありません。こうして、1クラス目は大失敗のうちに終わりました。

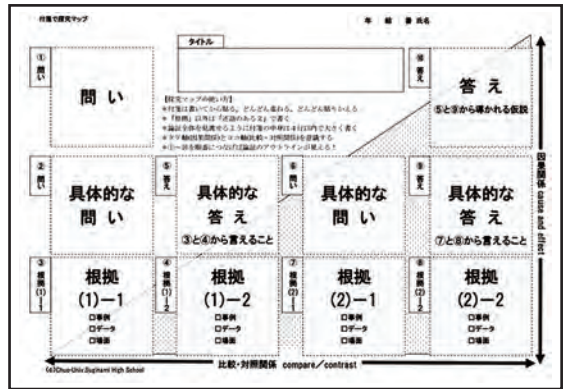
よし今度こそ! と思って2クラス目に行つて同じ問いかけをして、やっぱり失敗して、3クラス目に入る前に、もうやめました。仕込み方がそもそも間違っていたのです。皆さんくれぐれも、『山月記』を5W1Hでまとめてはいけません。

### ③グループワークで解釈を行い、その内容をひとりで発表する

最後に③です。生徒に作品の解釈をゆだねたうえで、一人ひとりのプレゼンテーションまでもつていきます。

プレゼンテーションをするために「探究マップ」を使います。「探究マップ」とは、本校で開発したグラフィックオーガナイザーです。A3サイズで、ちょうど75ミリ×75ミリの付箋が貼れるようになっていきます。

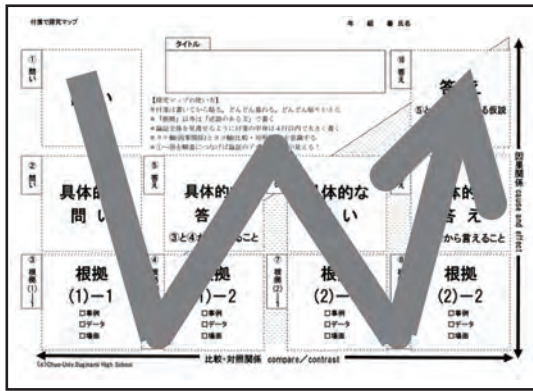
探究マップ (1)



まず、左上の付箋番号①の「問い」と書いてあるところが、論証全体の大きな問題提起になっています。英文のエッセイライティングであれば、ここがイントロダクション、論文で言えば、序論に当たります。その一段下に、②の「問い」と、⑥の「問い」があります。これは、①の「問い」を具体的にしたものです。その下には③④⑦⑧の欄に「根拠」として、具体的な場面や記述が入ります。そうすると、①のイントロダクションから入って、②③④の付箋をたどり、最終的な自分の主張を⑩の「答え」へとつないでいく、という

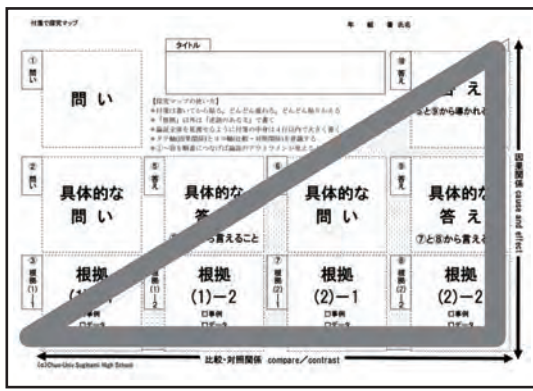
流れになっていきます。順番をふまえると、ちょうどアルファベットのWのような形をたどります。

W型のアウトライン



かも、ここに付箋を並べることで、論証は自然とピラミッド・ストラクチャを形づくりまします。

ピラミッド・ストラクチャ



ポイントとは、論証の抽象度が、タテ軸として揃っている、ということ。生徒に長めのレポートを書かせたことのある方はお分かりかと思いますが、ほとんどの生徒は、1000字以上の文章をひとつの構造体として作成することができません。はじめと終わりが、必ずといっていいほどねじれるのです。そこで、書く前にきちんと論証の構造を揃えた状態で整理させるといふプロセスが必要になってきます。し

こうすることで、論点がきれいに整理されます。具体的な場面を根拠としながら考察を重ね、それらを複合的にまとめることによって、自らの読みとしての解釈を主張としてまとめてゆくのです。最終的に自分が言いたい「答え」に対して、根拠を踏まえた因果関係で論証を組み立てる「考具」(「グラフィックオーガナイザー」が「探究マップ」です。さて、「探究マップ」を使った解釈の作業は以下のように進んでい

きます。まず、3人から4人の解釈のためのグループをつくります。グループで1枚の「探究マップ」を完成させることを目指します。そのためのガイドとして、以下のようなプリントを配布しました。

「山月記」論をつくるガイド

課題 中島敦「山月記」論を探究マップにまとめ、発表してみよう。  
 ※3人〜4人で1枚の探究マップを完成させ1人ずつ発表を行います(約3分)。

約900字で発表原稿を用意しましょう。

【例】として、「主人公(李徴)の分析」をする場合と、「主人公以外(袁蓼)の分析」をする場合を挙げました。それぞれの「問い」の例のあとには、これまでに手引きで精読してきた内容が並んでいます。ただし【例2】については、精読作業で使用したものだけではなく、発展的な「問い」も混ざっています。生徒たちには、ここにある例をそのまま使っても構わないし、自分たちで作ったものにしてもよい、という投げ方をしています。

すすめ方としては、まずは大まかな問いを設定し(付箋番号①)、それを具体的な問いに分解して(付箋番号②と⑥)、根拠となる場面を取り上げ(付箋番号③④⑦⑧)、今度はその場面からの考察を導き出して(付箋番号⑤⑨)、最終的な自分たちの解釈を提示していく(付箋番号⑩)という流れです。このあと、論証が組みあがったグループから一人ずつ自分の発表原稿をまとめいきます。

グループワーク



得のいく答えを出せるように読んでいくと思った。

「探究マップ」を使った解釈の作業は、2年次1学期末の生徒たちにとっては3ヶ月ぶりです。この生徒の記述からは、「なぜ(李徴は)虎になったのか」という「問い」に対する自分の読みをこの時点でまだ確立できていない、という自覚が読み取れます。しかし、これはよい兆候です。ここまでの精読作業で抱え込んだ問題意識が、読みへの主体性を引き出しているのです。他の生徒の振り返りを見てもみましょう。

「探究マップ」を書くことになったので、今までの「ふりかえりシート」をしつかり確認することができた。マップを作成していくのに今までの「ふりかえりシート」が役に立つので便利だと感じた。

探究マップは、どんどん付箋を更新することに意味があります。付箋が1枚変わると全体の論証が変わりますので、常に部分と全体のバランスを取る必要があります。全体を見ながら部分の手直しをしていくというのが基本スタイルです。

この時に生徒が書いた振り返りが次のようなものでした。

■久しぶりの「探究マップ」を使っ  
 ての授業で、また始まると思っ  
 た。なぜ虎になったのかを改めて  
 考えてみたが、まだスッキリする  
 考えを見つけれられていないので、  
 マップを作成する上で最後に納

この生徒が指摘しているように、「探究マップ」を書くためには具体的な材料が必要です。ここに至って、これまで書いてきた「ふりかえりシート」が自分たちの解釈を組み上げていくための貴重な資料になっていることに、生徒自らが気づいていきます。

■探究マップを書いているが「答え」から逆算して「問い」などを作っていくといい。

「答え」からの「逆算」——。探究マップの構造を理解すれば「根拠」からの帰納だけでなく「答え」からの演繹も有効であることがわかってきます。もちろん、欲を言えば、根拠からのアブダクションが理想ではあります。ただ、このような記述から、生徒たちが徐々に探究マップの仕組みを活かして、考え方を工夫し始めていることがうかがえます。

さて、探究マップを使って、生徒たちはこんな問いを立てました。

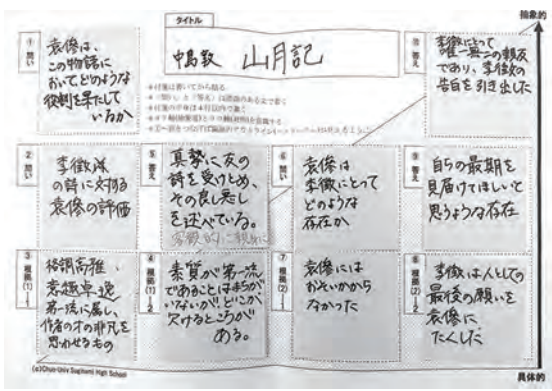
探究マップ(2)



付箋番号①を見て下さい。「李徴はなぜ虎になつたのか」から始まって、最終的に「問い」が変わっています。議論と考察の結果、最終的にこのグループは「李徴には何が欠けていたのか」という問いになったようです。

別のグループにはこんなのがありました。

探究マップ(3)

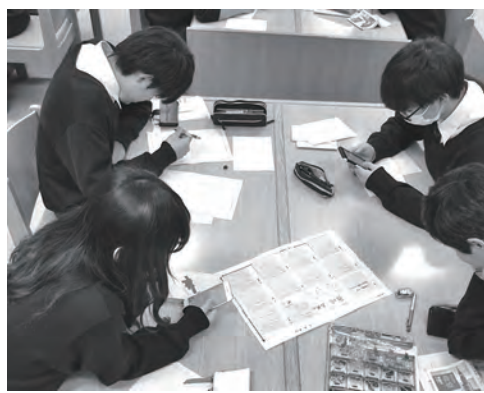


こちらの「問い」は、「袁愔はこの物語においてどのような役割を果たしているか」になっています。これは、ガイドとして配った【例2】を踏襲したものになっています。

具体的に言うと、まず彼らは②の「具体的な問い」を「李徴の詩に対する袁愔の評価」と置きました。その下にくる「根拠」は、李徴が暗唱してみせる漢詩の数々に対する③「格調高雅・意趣卓逸」という肯定的な評価と、④「どこか欠けるところがある」という懐疑です。これらを⑤で「真摯に友の詩を受けとめ、その良し悪しをまとめています。客観的に、親身に」と整理しています。さらには⑥で「袁愔は李徴にとってどのような存在か」と展開し、冒頭の再会の場面さえ、李徴が⑦「袁愔には襲いかからなかった」とことと、⑧「人としての最後の願いを袁愔に託した」ことに注目します。⑧は、李徴が妻子の行く末を袁愔にお願いした場面を踏まえているのでしよう。最終的な①の「問い」に対する答えは「李徴にとって袁愔は唯一無二の親友であり、李徴の告白を聞き出した」になっています。どのような順序で場面を拾うかによって、物語の再構成のしかたも変わってくるという一例です。

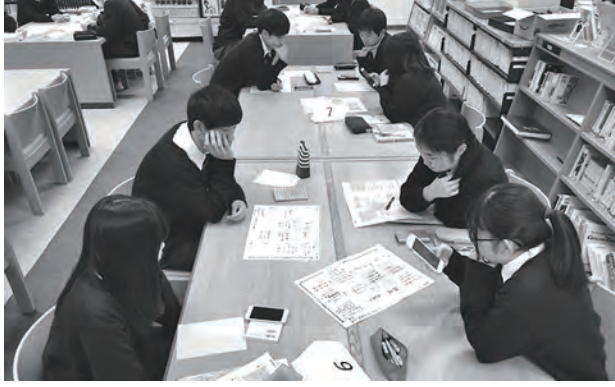
このように探究マップが組まれたら、発表原稿を書きます。テーブルの真ん中に探究マップを置いた状態で、1人ずつが自分の発表原稿をまとめていきます。写真は、自分の発表原稿をスマートフォンで書いている場面です。

発表原稿づくり



ず救っていくことができると考えています。プレゼンテーションはグループ発表です。発表の際は、ジグソー法を利用します。同じ探究マップを作成した解釈グループがバラバラになるように、発表グループをつくり

#### 発表風景



今回の場合は、12のグループで発表が同時に進行します。聞いている生徒たちは自分たちとは異なった論証を初めて聞くこととなります。

ただし、内容は初めて聞くかもしませんが、テキストは同じで論証を組む手つきが一緒ですから、相手と自分との共通点・相違点を意識しながら、比較して聞くことができま

す。今回発表した生徒からは、こんな振り返りが返ってきました。

■授業を受けるうちに場面の情景が見えてきた。

■少しづつ「問い」に対する答えを見つけていくのはすごくやりがいがあった。

■同じような「問い」を調べていた人でも「答え」は少しずつ違って面白かったです。

■ある班が李徴が虎になったのは幸せなことだったと言ってるのを聞いて、うんうん、となった。

■李徴は虎になることで、李徴が目指していた「一流の詩人」の本当の姿に近づけたのだと思う。

■李徴も様々な思いを抱いて、とても大変だったんだなと改めて思いました。李徴には「しあわせ」

になってもらいたい。教室で文学作品を読む醍醐味は、一人では気づかない部分に注目し、精読する作業を通じて徐々に場面が情景として立ち上がっていくプロセスを共有できることにあります。作品の解釈は、いきなりは見え

できません。それは少しづつ、段階を踏んで、共に読みを深めることで見えてくるものです。一方で、たとえ同じ「問い」からスタートしたとしても、同じ「答え」にたどり着くとは限りません。同じ「根拠」から

同じ「答え」が出てくるとも限りません。どの場面を取り上げ、どのように意味づけるかによって、作品の捉え方は無数に変化するのです。

ゆえに、主人公が窮地に陥っていく悲劇を描いた物語であっても、解釈の仕様によってはその人物を救い出すことも可能です。李徴の場合、虎になることによって初めて詩人としての自分に一歩近づけたかもしれないのです。読み手としての生徒には、李徴の「しあわせ」を願って本を閉じる読み方も現れます。

今回のまとめ

教員の振り返りです。音読は必ずペアでやります。教員が範読することとはしますが、最後まで読むことはしません。また、いきなり探究マップを使って論証を組もうとしても

上手くいきません。以前やったことがあります。ことごとく失敗しました。きちんと下読み(精読)をした上で解釈を組ませないと、深い読みは出てきません。そこで毎回必ず、振り返りをさせます。授業の最後の10分を使って、今日のこの授業

をメタ認知させることを目指しています。原稿を作っている時でも、最後の10分は振り返りです。

グループワークで、読む・聞く・話す。ひとり一人が、書く・聞く・話す。グループワークの中でディスカッションをさせて、書くときは1人です。喋る時もグループワークで

す。発表は1コマで終わらせませす。1人ずつ黒板の前に立たせて発表させても発表時間が長引くだけで、授業時間をまたいで発表にすると、早く発表が終わる生徒とそうでない生徒の間で温度差も生まれますので、全員同じ日に発表をさせます。スマートフォンで作成した発表原稿は、Googleformなどのアンケートツールで回収することも可能です。

全体に対する解説は限られていますが、例えばあるグループの話合いで面白い問いが出てきたら、過去の文学研究の成果をそのグループには教えます。定番教材だからこそ、こちらにも先行研究等の引き出しが豊富にありますので、グループごとにちよっと違った視点で読み方を提示することができます。その

解釈は最後の発表でほかの生徒にも共有されますから、一斉授業で教員の解釈を提示するのではなく、生徒自身が自分で読みを引き出して

くるといふことにより、これまでの知見

が活用できるのではないでしょう  
か。発表原稿も、教員が添削するこ  
とはしません。教員が添削するの  
ではなく、自分自身で書き換えを行  
っていく訓練が必要なのだと思います。

### 【質疑応答】

Q: 定期考査はどうしていますか？

A: 試験問題の作り方は、今まで通りです。いちど試してほしいのですが、皆さんが以前作られた定期考査と同じ問題を、ぜひこの授業の後に使ってみてください。おそらく平均点は高くなっているはずですが、なぜならば、かつての講義形式で行っていた授業の時よりも、この授業を受けた生徒たちの方が、本文を丁寧に読んでいるからです。アクティブ・ラーニングに踏み出したからといっていきなり全てを変えるのは難しいと思いますから、少しずつ変えていければよいのではないかと考えています。

Q: グループワークが機能しない場合にどのような対応をしていますか？

A: まずはクラスの中で生徒同士の関係性を構築できるようにきつかけ作りが必要だろうと思います。年度最初の授業はいきなりテ

キスト読解に入るのではなく、ペアワークやグループワークで簡単なゲームを試みるなどして、この授業の基本スタイルを共有する時間として使っています。担任の教員と連携することもありますが、授業以外の生徒との関わり方ということが影響してくる場合もあります。

Q: グループワークで面白い考えが出てきたときにどういう関わり方をしていますか？

A: こちらが持っている引き出し（例えば先行研究の成果）を、最大限、提示します。言葉を与えることによって、彼らのその場での思考が活性化するのであれば、その場合は遠慮しなくていいと思っています。読みの多様性を前面に押し出しているだけでは、生徒たちの読みは深まっていきません。記述を事実として踏まえていけば、どのように読んでも構わないはずですが。

Q: この形で授業をすると時間がかかりそうなので、試験範囲の設定が難しいのではないですか？

A: 授業内で作品全体を網羅することはできません。ゆえに、授業で扱う内容自体は、かなり省略しています。例えば『山月記』の場合

は、李徴の告白の中で「理由もわからずに押しつけられたものをおとなしく受け取って、理由もわからずに生きてゆくのが、我々生き物のさだめだ。」という重要な箇所がありますが、今回、この記述には深入りしていません。最終的にこの授業で生徒に要求しているのがどのようなものなのかというところから逆算して、本質的な問い「揺さぶり」をかける「問い」をいくつ並べられるかというところがポイントになってくると思います。

Q: このような授業をした後で、初読の文章の読解力に影響はありますか？

A: 定期試験には、必ず初読の問題を一題入れています。国語力は、初読の文章をいかに読めるかというところに現れると思いますので、一本を丁寧に読むことを通じて読み解く力がどれくらい身についたのかということと定期試験で測りたいと考えています。

Q: 古典文学を使ったアクティブ・ラーニングなどの実践がありますか？

A: 私は現代文を担当することが多いので、古典文学を使った実践は残念ながらありません。ただ、今

回の授業で言えば、李徴が詠んだ即席の漢詩について「中学2年生がわかるように翻訳しなさい。」という課題を出しています。今回の『山月記』の発表でも漢詩の分析を論証の根拠として使っているグループがありました。漢詩を読み解くということが自分の読みを深めるために必要だという動機づけさえしつかりできれば、生徒にとって古文や漢文というのも取り組みたくなる題材になりえると思います。調べる作業を面白くするためにはどうすればいいのかという工夫が必要なのではないでしょうか。その点を掘り下げていくためにこそ、定番教材の教材としてのあり方そのものを問い直していく作業が必要なのだと思います。

Q: 「網羅の呪縛」が問題です。一人で一学年を持つのではなく、分担して持っている場合、網羅の授業をしている教員とどのように良い連携を図っていけばいいのでしょうか？

A: 教科間の壁、教科担当者間の壁、両方あると思います。学年の担当者間で最低限同じことをやると、いう足並みを揃えておかないと、次年度以降に教科担当が変わった時に積み上げができなくなり

ますので、どのようなグラウンドデザインのもとで単元や個々の授業を組み立てていくのかというところが難しいと思います。もちろん私も自身もうまくいつていません。同じ学校で働いている人が持っているものを、できる限り引き出す方向でまともていく方法を探していきたいと思つています。

Q: 評論文の場合はどのような授業スタイルになりますか？

A: ちょうど授業で扱っているのもで、教科書に載っている隈研吾さんの「コンクリートの時代」という教材を使って説明します。この文章は、二十世紀の建築が「コンクリートの時代」であったことを踏まえ、そのコンクリートが世界中の文化や多様性を塗り固めていったと批判しています。そこで、探究マップの「根拠」の部分には筆者の言説を整理させたいので、「答え」の部分は生徒に考えさせる、というようなやり方が考えられます。先日の授業では、探究マップの①に「これからの時代に求められる建築とはどのようなものなのか？」という「問い」を設定しました。そうすると生徒たちは、「コンクリートの時代」という文章を読み、筆者の主張を

踏まえながらも、そこには書いていない未来を見据えた結論を導き出すことになりま。評論を要約するのであればすべての生徒が同じ結論にたどり着くように授業を展開していくべきだと思いますが、この評論で何を考えさせるのかというところから授業を組み立てるのも面白いのではないのでしょうか。本文に対して開いた「問い」を用意した上で、入り口は一緒だけれども、筆者の記述を使って一人ひとり異なった「答え」が導き出せるようになってきたらよいのではないかと考えています。

おわりに

—探究する主体を育てる国語

新しい指導要領に基づいた授業運営は、「教員」ではなく「生徒」が主役となるものです。そのためヒントを、日々模索しています。試みに、新しい学びのためのキーワードを3つ考えてみました。本稿でも触れているものもありますが、その3つとは「つながり」と「深掘り」と「ふりかえり」です。

第一に「つながり」とは、これまで学んできたことと今学んでいることとのつながりに気づくこと。既知の情報と未知の情報とを関連づけることです。この「つながり」に気

がつくことができれば、一見無関係なものを結びつけ、情報のすきまを埋めることができるようになります。

第二に「深掘り」とは、ひとつのテーマを掘り下げて本質をつかまえて、さらなる気づきをもたらすこと。学んだことをふまえて新しい「問い」に出会い、さらなる探究のサイクルへと自身を導いてくれます。

第三に「ふりかえり」とは、学びを俯瞰し、自己のありようを見直し、次の学びへの動機づけとすること。学ぼうという意欲は、何もせずじっとして生まれてくるものではありません。未知のものに出会い、異なる位相を結びつけ、ある一点を掘り下げようと試みる過程で、生徒たちは自ら、学びへと向かっていきます。他者へとひらかれた言葉を発することのできる場として、国語の教室をデザインすることが求められています。たとえ科目の名前が変わっても、私たちにできることの本質は変わらないのだと信じています。

① 齋藤祐「アクティブ・ラーニングで『羅生門』」2017年3月、中央大学杉並高等学校『紀要』第26号所収

② 2017年6月の「小学校学習指導要領解説総則編」では、以下のように記されている。「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に

立つた授業改善）を推進することが求められる」。3～4頁

③ 奈須正裕「資質・能力」と学びのメカニズム」2017年5月、東洋館出版社、143頁

④ 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」2016年12月、48頁

⑤ 溝上慎一「現場の改革につなげよ！—学習指導要領改訂（案）に対するコメント」2017年7月、溝上慎一教育論

http://smizoknet/education/subpages/a00018national%20curriculum%20comment.html

# アクティブ・ラーニングを成功に導く論理的思考 講演録

多摩大学教授 樋口裕一

(平成二十七年十一月九日実施)

○司会者 では、今回の講師である樋口裕一先生のご紹介いたします。

樋口先生は、小論文の神様と謳われ、国語科の教員であれば、先生と仰いだ方ではないかと思えます。現在は多摩大学教授、それから小論文指導を行う白藍塾の塾長として

ご活躍されております。大学ではフランス文学を専攻し、その後、予備校講師として、入試小論文の指導を行っていた経歴をお持ちです。また、二五〇万部のベストセラーとなつた著作『頭がいい人、悪い人の話し方』を初め、近年では学研からクリティカル・シンキングの教材も出版されており、大学、あるいは高校での教育現場とは切つては切り離せない素晴らしい先生です。それでは、樋口裕一先生、よろしくお願

いいたします。

○樋口 ご紹介にあずかりました樋口です。小論文の神様ということになっていますが、全く普通のほそぼそしゃべる人間ですので、そのつもりでお聞きください。

今日の雨模様の中、たくさんの方がこの場にいらしているのは、それほどアクティブラーニングが問題

になってきていることの表れなのだろうと思えます。そこで、私の立場からアクティブラーニングについて考え、それからこれまで実践してきたことを紹介したいと思います。

先ほど紹介にあずかりましたように、私は多摩大学で教えているのですが、多摩大学というところは、今、アクティブラーニングの先端となるようなことを行っているとい

うので売り出そうとしております。「ゼミ中心大学」というスローガンを二十年ぐらい前から掲げておりまして、いろいろな大学のゼミと違い、座学ではなく実学としてのゼミを設置しています。例えば私のゼミは「クラシック音楽コンサートを企画運営する」ということに八年前からずっと取り組んできました。これまで葉加瀬太郎さんや三枝成彰さんなどをお呼びして、多摩大学内で演奏会をやっていたいたり、講演会をやっていただいたりしました。おともいも松尾俊介さんという世界的なギタリストをお呼びして、彼に演奏会をやっていただきました。

どうい風にお願すれば、ビッグネームの人が安く、場合によって

は無料でコンサートを開いてくれるか、入場料としてどういう値段をつければいいのか、そういったことをゼミの学生に考えさせ、彼ら自身に企画運営を行ってもらうわけです。宣伝の仕方を考えさせ、チラシを作らせて、どのようにして売り込むかということまで考えさせるとい

う活動を行っています。これこそまさに、アクティブラーニングだろうと思えます。

というわけで、小論文、それからクリティカル・シンキング、そういう形で、一方的な講義ではない勉強

というのを今までずっとやってきましたので、その成果も含めてお話ししたいと思います。

今日は、最初にアクティブラーニングとは何かということについてお話しいたします。二つ目に、中学生、高校生に対して、具体的にどう

いうアクティブラーニングの問題、課題を出せばいいのかについてお話しします。三つ目に、指導方法を、

コツも含めてお話しします。その上で、ここにいらつしやる皆様に、生徒役になってアクティブラーニングをやっていただくと思っております。

まず初めに、アクティブラーニングとは何かということからお話しします。私は、皆さんはアク

ティブラーニングをどのように捉えているのだろうか、どのように実践しているのだろうかとネットで調べてみました。わからないですね。ネットをみてもさっぱりわからない。何をやっているのかかわからない。理念先行で具体的にどうすればいいか、何をしているかという成果が余り芳しくないように思います。恐らくそこに皆さん迷いを感じていらつしやる。どう指導してよいかかわからない。やってみると組織化できない。体系化できない。マニュアル化できない。どうすればいいのヒントを得たいと思つていらつしやるのではないのでしょうか。

では、アクティブラーニングとは何かということですが、まず調べ学習ではない。これはよく誤解されている節があります。そして、思いつき発表会ではない。プレインストーリー

と聞いて、いろいろなことを思いついて、それを発表する、というものではない。やはり論理的に物事を考えて、それをしっかりとプレゼンすることであると私は思っております。もつと言いますと、実際に役立つこと、実際に社会に出てすることの模擬版がアク

ティブラーニングであらうと思

います。具体的にいいますと、例えば会社員になったときに、どんな商品

を開発すれば売れるのか、なぜこの商品が売れないのか、どこにどう原因があるのか、どういう広報活動をすればうまくいくのか、現状をどう改善していくべきかといったことを話し合っただけで済ませず、新しい手を打つ、ということをやっているはずで、公務員の場合も同じでしょう。地域の発展のために何をすればいいのか、市民サービス、住民サービスとして何をすればいいのか、そのために何が不足しているのか、どういう改善策があるのか、そのためにどういうプラン・マイナスがあるのか……

先生方の場合は恐らく、なぜ生徒たちはわかってくれないのか、どういう授業にすればいいのか、改善点はあるのか、教材はどうするのか、それを考えていらつしやると思います。まさにそれを考えるのがアクティブラーニングなのです。ただ、あまりに難しいと手に負えません。本格推理小説と同じです。もしくは教習所の運転と同じです。教習所のたどえのほうはわかりやすいでしょうか。実際の交通といふのは、一般道に出なくては意味がないのですが、初めから外に出るわけにはいかず、教習所の中で車の運転をするでしょう。それと同じで、教習所、つまり学校の中での社会勉強、学校の中で、社会でやるのと全く同じことをやるのがアクティ

ブラーニングです。本格推理小説のたどえはどういうことかというところ、こういうことです。現実の事件というのは複雑であつて、さつぱり実情がわからない。犯人がわからないこともしばしばある。登場人物でいらない人が犯人だったりもします。けれども、アガサ・クリステイとかエラリー・クイーンのような昔ながらの本格推理小説というのは、無人島のような舞台で殺人が起こつて、物語の中に必ず犯人がいる。非常にわかりやすい。こういう小説のよ

うに、模擬版の社会的問題をつくつて、それを考えさせるのがアクティブラーニングであると捉えらる、いろいろなることができるだろうと思います。

では、二番目の、具体的にどういう問題を出すのかというテーマに移ります。学校にかかわる問題、共通体験が皆さんにありますので、これは一番出題しやすいと思います。例えば、学園祭の催しをどうするか、どう宣伝するか、どうやれば人が集まるか。何かのイベントを企画させ、考えさせる。これは一番簡単だろうと思います。他にも、学校新聞の企画もあります。どうやったらたくさんの人に読んでもらえるか。壁新聞でもいいと思いますし、配布するので

もいいと思います。どういう記事を書いて、どのようにすればいいのか。それを企画する。もしくは図書館、図書室、その他もろもろの施設をどうやったらみんなに利用してもらえるか、どういう工夫をすればいいのか、どういう宣伝をすればいいのか、どういうポスターをつくれ

ばいいのか、というのがあります。または、運動場をどう使うか。これは整理が大変だろうと思います。部活で部によって勢力争いがあるでしょうから、それをどう整理する

か。もうちょっと深刻な問題ですと、例えば、いじめをどう克服するのか、という問題もあります。いづれにせよ、学校にかかわる問題でしたら、簡単に生徒たちはアイデアを出しやすはずで

す。家庭にかかわる問題、これは家庭によつてかなり異なりますので、簡単にはいかならないと思つて、例えばベットの役割をどうするかというのを学校で考えさせることもできるだろうと思います。もしくは家族旅行でどこに行くのか。もしくは子供の好き嫌い、自分も含めて、食べ物の好き嫌いをなくすためにはどのようにすればいいのか、という問題も取り上げやすいと思います。

ば、要するに地域の祭りをどのよう

に活発にするのかという問題があります。他にも、どういうボランティア活動が必要か、その活動にはどのようにすれば人が集まるのか。もしくは閑散とした市のホールをどうするか。今からこのワークショップで取り上げようと思うのはその種の問題です。

社会全体にかかわる問題は、高校生になかなか難しいだろうと思います。これは大学生ぐらいになるだろうと思いますけれども、例えば、どうやれば中国と仲よくできるか、どうすれば国際平和が実現できるか。これは余りに難しいです。

高校生にとつては、今挙げた中で一番考えやすいのは、やはり学校にかかわる問題だろうと思います。それだけでもたくさんアイデア、題材が転がっているはずで、今ここで挙げたのはほんの一例です。ほかにもたくさんあるだろうと思ひますので、そういう問題を具体的に考えさせてはいいかがでしょうか。

それでは三番目の、指導方法とそのコツというテーマに移ります。15分後くらいに、先生方に実際にグループワークをやつてもらおうと思つています。グループワークの後には、グループごとに発表してもらおうという形になるだろうと思います。



グループワークの際には、まず役割分担を決める必要があります。絶対決めなければいけないのは、司会と書記と発表者です。その3人は、必ずしも別の人である必要はありません。司会者と発表者が同じ、書記と発表者が同じでももちろん可能だと思います。後ほどのグループワークでは、どなたか率先して司会をやっていたけると助かります。生徒同士のグループワークの場合には、率先して司会を務めるということはほとんどないと思いますので、先生による指名でももちろん構いません。ただし、初めのうちは多少出来のいい子、活発な子を司会者にする必要があるだろうと思います。

この紙をご覧ください。今日先生方にやっていただきたい課題は、1ページ目の4です。NGOのメンバーが落語会を開くという設定にしています。本当はシビック文京でクラシック音楽のコンサートを開く、という課題にしたかったのですが、シビック文京を調べてみたら、会員にならなければ、使用料とか、そういうものをネットで見ることでできませんでした。そこで、今回の課題については、ネットで調べられるほうがいいと思います、なおかつ自分が使ったことのあるパルテノン多摩を会場に設定しました。パ

ルテノン多摩をご存じない方がいらつしやると思うので、簡単に説明しますね。パルテノン多摩は、多摩市の多摩センター駅にあります。多摩センター駅というのは、京王線と小田急線とモノレールが通っています。あのあたりでは交通の要衝です。パルテノン多摩はそこから徒歩5分ぐらいのところにあります。2ページ目に詳しく書いてありますが、そこで落語会を催したい、というのが今回の課題です。イベントを限定します。何でもいいのかということにしますと、実は何でもありになってしまつて收拾がつかなくなつてしまいますので、ある程度制限が必要だと思います。

また、課題となるイベントは、企画がなるべく難しくなるものがないと思います。例えば、きょううちの娘はボルノグラフィティのライブにわざわざ上田まで行つてみたいですね、そういうのはやりものですから、なかなか客が集まっていますから、なかなか客が集まらないようなものにしましょう。今回は、国語の先生がたくさんいらつしやると思いますので、落語ということにしました。落語会を催すと高齢者ばかり集まつて、若者はほとんど来ません。大変悲惨なことになります。実際やろうとしてみたのですが、クラシックコンサートもお

年寄りばかりなのですけれども、落語はもつと悲惨な状況になります。というわけで、今回は、とりあえず落語という枠は守つて下さい。落語と呼ばれる範疇というのは守つていただきたい。落語会をやるという前提でお考えになつて、どうするかというのを考えてほしいと思います。先ほど言いましたように、本当に自由に考えさせると何も出てきません。制限が必要です。落語という制限が必要なのです。

また、ちょっと難し目の制限が必要であると同時に、マニュアルが必要だと思つています。何もなしに自由に考えてもアイデアは出てこないし、出てきたとしても行き当たりばつたりになつてしまいます。ある程度マニュアル化して、これについて考えなさいということを示してこそ、深い鋭い考えが出てくるというわけです。

では、まずここで落語会とは何なのかを定義してみましょう。どこまで落語とみなすか、漫才師が落語をしても落語会といえるかどうか。何を落語会とみなすかというところも考えていただいでいいだろうと思います。ちよつと自由に考えてくださつて構いません。若者を呼ぶわけですから、普通の落語をやつたのでは来ないと思ひますので、いろいろ考えてみてください。

それから、観客の高齢化という状況も考えてみましょう。今どういう状況なのか、これはわかり切つていないので、そんなに考える必要はないかもしれません。次に原因、なぜ若者が来ないのかを、社会的背景も含めて考えてください。いろいろな要因があるだろうと思ひます。なぜ若者が来なくなつたかという要因を考えなければ、若者を呼ぶための新しいアイデアは生まれません。それから、若者に人気のイベントとはどんなものか、人が集まつているイベントはどんなものかということも考えるのも、この課題を進める上で参考になるだろうと思ひます。こういったことを考え、ここにメモして書いていただきます。

次に3ページ目をみてください。歴史性、地理性。これについては、実は考えなければ考えなくていいのですが、私の小論文指導で3つのF、3つのW、1つのHというのを意識したメモのとり方を指導していますので、ある意味それに合わせています。まずは、歴史性、つまり、かつてはどうであったかを考えてみてください。今までのいろいろなところで、落語を若者に開放しよう、若者の観客を増やそうという試みがあつただろうと思ひます。今までどこかでやっていないだろうか、成功

した例はないだろうか、あるいは失敗した例はないだろうか、と。失敗ももちろんそれを改善すればいいわけですから、それを考えてみることは大切です。

次に、地理性です。どこでも古典芸能の舞台というのは若者が来ずに困っているはず。フランスでも多分同じような状況はあるだろうし、アメリカ、イギリスももちろん同じでしょう。というわけで、どこかよその国で成功した例はないであろうかということ調べていただく。今回、先生方にはこれを書いていただくのはちょっと時間的に無理があるかもしれませんが、でも、実際に生徒たちにやらせるときには何日かかけて宿題を出して、あるいは取材に行かせて、こういうのを調べさせるという手はあるだろうと思います。

さらに、販売促進のための方法、これは3ページ目と4ページ目にある、当日のイベント内容と関連しています。先にイベント内容を考える手もあるだろうと思います。必ずしも古典的な従来の寄席、落語会で、真打が2人出てきて、何だかんだと1席ずつ20分から30分ぐらい語るといってはいけません。イベント内容を考えつつ、それを販売促進のための宣伝方法について、プラス面とマイナス

面も考えてほしい。何かやり過ぎると落語会から文句が出て信用してもらえなくなるとか、いろいろな問題があるだろうと思います。

では、4ページ目をご覧ください。先ほど言いましたイベント内容。それから、これからの作業について書いてあります。これは今回、先生方には関係ないのですが、実際に生徒にやらせるときには、次回何をするか、誰が何をするか、今後の役割分担とこれからの日程表というのが必要になるだろうと思います。

今日はこの場で先生方にやっていただくためにこういう形にしましたが、実際にはもっと欄が広くて、もっと自由にたくさん書ける紙を用意するほうがいいのではないかと思います。いずれにせよ、このように項目を決めて、これらについて考えさせて、そこでアイデアを出させるといって、ある程度制限を設けたほうが、いろいろな深いアイデアが出るわけです。

このように、アクティブラーニングの指導方法としまして、マニュアルに沿って考えさせるのが有効です。ただし、しばらくたって、生徒たちがアクティブラーニングのグループワークに慣れてきて、非常に上達してきましたら、このマニュアル、つまり、何を考えるかという

ことについても、生徒自身に考えさせるというのが本当は理想です。ただ、なかなかそうはなりません。うちの大学ではなかなかそうなりませんが、先生方の学校ではそういう可能性は大いにあるかも知れません。

また、グループワークの制限時間を決める必要があります。これも先生方もやっていらつしやると思うのですけれども、20分後までにここまでやりなさいと、時間を区切るといふのは非常に大事な要素だと思います。実際の社会でも、やはり急がなければいけない場面は多いというのがありますし、授業の組み立ての上でも、制限時間を設ける必要はあるはずです。

それから、調査の際には何をしても構わない、とすべきです。学校によつてはスマホを禁止しているところはたくさんあると思うのですが、基本的には、スマホ、できればパソコンを使って、ネットにつないで、いろいろな情報を見るのが望ましいと思つています。

アクティブラーニングの心構えについてももう少しお話しさせてください。やはり楽しませなければいけないと思つています。アクティブラーニングというのは一方的な授業とどこが違うかというと、楽しむ

ます。楽しみがどこにあるかというと、答えは1つではないということと、答えは1つではないというところだと思つています。答えが1つではないということは楽しめる要素です。答えが1つではつまらない。できる人間とできない人間が出てくる。1つの答えが出た時点で終わってしまう。それ以上何かしようという気にならない。でも、答えは1つではない。ほかの答えがある。もつとおもしろい答えがある。もつとひねった答えがある。今回の課題ですと、客がたくさん来る手はたくさんある、ということ。

答えが1つではないということのもう1つのいい点は、レベルに応じて様々な答えが期待出来るということ。生徒の中には、勉強のできる子、できない子、アイデアのある子、ない子、いろいろいるのですが、アクティブラーニングではいろいろなレベルで答えが出てくる。それはそれでいいのだからと思つています。もちろん鋭い確かな答えもあるでしょうし、すつとぼけた、ちよつと現実にはあり得ないような答えもあるでしょう。それはそれで構わないのです。これは現実

にやったら絶対に失敗するとわかっていても、とりあえず考えてみる必要が大事で、とりあえず考えさせましょうということ。答え合わせをする必要は必ずしもありません。

いろいろな考え方があつた。それがむしろ大事だと思つています。

それから、褒めるといふことが絶対に必要です。とりあえず全部褒めましょう。どんなばかな答でも褒めましょう。ふだん勉強のできない子を参加させるのが大切です。ふだん勉強のできない子が参加して、その子がいいことを言う。結構いいことをいふと思つて。自分の経験でいふと、大学ですから、勉強とちよつと違うかもしれないけれども、成績のよくない子が非常に鋭いアイデアを出す。うちの大学の場合ですと、大学で勉強のできない子つて、しばしばアルバイトをやつてゐるのですよね。アルバイトをやつた子というのは、実は様々なアイデアを結構もつていたりする。ですから、中学、高校はちよつと状況が違うかもしれないけれども、勉強のできない子に商才があつたりすると思つて。ふだんできない子が褒められると、クラスが活気づく。あいつがやるのだつたら俺もやるぞ、となるわけです。

恥をかかせないといふことも大事だと思つて。なぜ一方的な授業があつたらぬか、もしくはそのような授業だと生徒が委縮してしまふか。あれは恥をかくのが怖いからです。何を言つてもいい。何を言つても褒められる。何を言つても、おも

しろいねと言つてくれるというのでしたら、生徒は好き勝手いろいろなことを言つて。それが大事だと思つて。

アクティブラーニングで企画したことを実現するのはなかなか難しいと思つて。例えば生徒に今回の問題を与えて考えさせても、若者が集まる落語会は多分実現できません。けれども、とりあえずあれこれ考えること自体が大事なのです。アクティブラーニングというのはそういうことだと思つて。現実性がなくていい。いろいろ考えて、いろいろなアイデアを出して、その訓練をする。最終的に、これは無理だよね、となつても、それはそれで全く問題ないだろうと思つて。機会を捉えて発表させる。これも非常に大事なことだと思つて。

私が大学で行つてゐるアクティブラーニングでは、最終的にプレゼンテーションをさせるのですが、それだけではなかつて、途中でアイデアを持つてさせるというのをやります。今までこの欄を書いた人、ちよつと持つておいてと言つて、持つてこさせて、評価してあげる。評価するといふのは、つまり褒めるといふことですね。けれども、こういうのが大事だろうと思つて。そういうのが大事だろうと思つて。そうしないと、自分から発表しない子がたくさんいます。

もう一度言つて、アクティブ

ラーニングでは、1億総活躍というわけでもないのですが、ふだん目立たない子も活躍させたい。目立たない子を活発にさせたい。そうするとクラス全体が活発になる。ですから、できない子だけではないで、おとなしくて発表したがらない子にも脚光を浴びさせたい。そのためには、とりあえずメモを書かせて、アイデアを書かせて、途中で持つておいて声をかけるのです。すごいアイデアではないか、これ、ちよつとみんなの前で発表してよ、と。そういうふうにしたら集団全体が活気づくと思つて。拙ずかしがつて自分の意見を言いたがらない生徒がたくさんいますので、あえてつまらない意見をいつてくれといふ手もあると思つて。あえてバカな意見をいつてみます。あえてバカな意見をいつてみます。悪い意見といふのも実はうれしいのだ。どこが悪いかみんな考えよう。そのためにあえて、つまらないなと思ふ意見もいつてくれるのだ。このようにこちらが言いますと、いい意見か悪い意見かわからなくても、悪い意見の例にもなるかもしれない、自分では後で悪い意見のつもりでしたといふば、済む、という口実を与えることができま

す。すると、拙ずかしがらずにどしどし意見を発表するようになり、最終的には自分のアイデアに自信を

持つようになります。

言葉足らずのアイデアもたくさんあると思つて。その場合は、ほとんど本人が言葉足らずであることをわかつていない。わかつてないから言葉足らずで、ぐずぐずと申すのですが、それは先生のほうで補強して、いい意見ではないかと思つてあげましょう。つまり、こういうことだよと鋭い意見に話をもつていつてあげるといふのがうまい方法なのではないかと思つて。

それから、ヒントを与えることも大切です。生徒たちに対しては、もちよつと何かするといふアイデアになるというときに、ヒントを与えるわけです。ただ、大事なのは、答えは言わないことです。あくまでも生徒に自分で発見した気にさせることが肝心だと思つて。先生が指導した、先生に言われた、先生の答えを、先生がどう思つてゐるかといふのを推測して、その答えを出すのではつまらないと思つて。ですから、ヒントを出して、本人が自分で答えをみつけ出した気にさせることです。

また、これも先生方は実際にやつていらつしやうと思つて、あるグループが発表したら、ほかのグループの人にその発表についての意見を言わせるのも効果的です。アクティブラーニングでは、なるべく

先生は介入しない方がいいと考え  
ています。

では、グループをつくって実際に  
課題に取り組んでいただきたいと  
思います。グループで出した意見  
を、後ほど発表していただきます。  
これも5ページ目にある、発信の  
型、4部構成で、型どおりにお願  
いします。先生方にこのように言  
うのは大変申しわけないのです  
けれども、私の小論文指導を応  
用させていただきます。

第1部、最初に提案してくださ  
い。こういうイベントをする、こ  
ういう宣伝をするという自分た  
ちのアイデアの一番の売り物を  
発表してください。第2部は、「確  
かに……、しかし」です。「確  
かに」で自説を述べ、  
「しかし」で譲歩して、「しかし」  
で自説を述べてください。自分  
たちのプレゼンには、問題点、  
クリアしなければいけない点  
がある。確かに、これにはこ  
ういう欠点がある。しかし、こ  
の方向、これが最適である、と  
述べてください。第3部で、そ  
の方向が最適である理由、こ  
ういう方法をとればそれが可能  
であるという具体的な方法を示  
してください。第4部は、今後  
の作業日程の発表です。今回  
は、これからこういうことを  
するということを発表してくだ  
されば、それで構いません。

後ほどこれを発表していただき

ます。後ほどいいものは7時10  
分からです。やっていただくのが  
先方です。残りこちらからは指  
示いたしません。それまでに2  
ページ、3ページ、4ページの  
項目について、今回考えなければ  
考えなくていいという項目もあ  
ると思いますが、分擔するなど  
して考えてください。いろいろ  
なやり方があると思います。グ  
ループの中で役割分擔などど  
ういう工夫をしたかというの  
は後ほど先生方にお話してい  
ただくとして、そろそろ始め  
ていただきます。

もう一度、2ページの最初、パ  
ルテノン多摩についてのデータを  
説明しておきます。先ほどいま  
した多摩センター駅から5分ぐ  
らいのところにあるホールで、  
大ホール1, 114席、小ホール  
304席です。会場とするのはど  
ちらでも構いません。できれば  
大ホールでやりたいですけれど  
も、なかなか難しいかもしれません。  
施設使用料はここに書いてあ  
るとおりです。嘶家の謝礼は、  
真打は10万円ぐらい、二つ目  
は5万円ぐらいです。もつと下  
の前座というのは2万円、3万  
円、場合によつてはただでもや  
ってくれます。いくらならや  
ってくれるか聞くと、向こう  
からは要相談といわれます。す  
から、本当のことをいうと、値  
切れば半額ぐらいでやってく  
れる

かもしれません。何ともいえませ  
ん。でも、向こうとしては安く  
ていいです。実際に嘶家と話を  
つけたことがあるのですが、安  
くてこのレベルであるというよ  
うな答えが返ってきます。チ  
ラシの料金はここにある程度  
です。チラシをつくらんとし  
ますと、このくらいかかります。  
赤字にならないように考えて  
ください。理想的には2, 3万  
円の黒字になるように。たく  
さんもうける必要はないけれ  
ども、最低でも黒字になるよ  
うにしましょう。嘶家の謝  
礼は、事前に決める必要はな  
いかもしれせん。客が何人入  
ったときは幾らというように、  
いろいろな手があると思いま  
す。それも含めて検討してみ  
てください。

では、どうぞ、30分ぐ  
らいしか時間があります。まず  
司会者と書記と発表者を決  
めていただけますか。司会と  
いうのは、この数人の司会  
です。発表者というのは後  
ほどみんなの前で発表して  
いただくということです。そ  
のつもりでいてください。全  
てのグループに発表してもら  
うことはできないと思いま  
す。もちろん我々のグル  
ープこそと思うところに  
発表していただきます。

(演習)

あと8分ぐらいなのですが、そ  
ろ詰めに入ってください。入  
場料、ギャラ、日時、内容、  
できれば出演者、それも  
発表してください。う  
れしいです。そこまで決  
めるのはなかなか難しい  
かもしれません。それから、  
理念、どういう理念でやる  
のかということも、これも  
大事なことです。くれ  
ません。それから、大  
ホールを使うか、小  
ホールを使うかとい  
うのも考えてくだ  
さい。あと7分ぐ  
らいです。

(演習)

あと1分ほどなの  
ですけれども、時間  
大丈夫ですかね。も  
うちょっと延ばして  
ほしいというグル  
ープはありますか。  
あつたら手を挙  
げていただけます  
か。では、5分延  
ばします。

(演習)

そろそろ時間  
になりました。こ  
れから30分ぐ  
らい使つて5組  
から10組ぐ  
らいに発表  
していただき  
たいと思つて  
います。どの  
グループか  
発表して  
いただける  
ところはあ  
りますか。お  
もしろい  
アイデアを  
思いついた  
ところはあ  
りませんか。  
(参加者による  
発表と樋口先生  
による講評)

先生方は非常に優秀  
ですので、おもしろ  
いアイデアが次々  
に出てくるのです  
けれども、これを  
生徒たち

にやらせると、本当につまらないアイデアがたくさん出てくると思いますが。あり得ない。もしくは、そんなお金があるはずがないという、そういうのが出てきますけれども、それも先ほど言いましたように全部褒めてください。その上で、それをやるためにはこういう条件が必要だよ、これをクリアしなければいけないからなかなか難しいね、と、そういう話にもっていくことが大事だろうと思っています。

こういう形でもし面白い題材を与えて、次から次にアイデアを出させて、つまらないものでもとかく褒める。こういう形ではほぼ全員に発言させるというパターンをとると、アクティブラーニングは非常に盛んに、にぎやかになっていくでしょう。それが大事です。答えは1つではありません。答えがないかもしれません。もう一度言いますが、本当につまらないことを言っても構わないのです。たくさん考えているうちに、だんだん正当な鋭いことを言うようになる。数が大事なのです。自分で考えようとして、参加することが大事なのです。質は問わない。下手な鉄砲百撃ちや当たるといふ感じで考える、それがアクティブラーニングの醍醐味だろうと思えます。そうすることによって、できる子はより一層できるようになる

し、できない子、勉強の苦手な子、そういう子たちもとりあえず参加するようにになって自信を持てるようになります。

一番大事なことは、生徒が自分の考えを持つということだと思っております。いろいろな教えていて、このごろ最も思うことは、自分の考え、意見を持たない子が多いということです。例えば小論文を指導している中で、いろいろな知識を教えても、知識というのは自分の意見を持つていないと頭に入らないのですよね。例えば安保健案はけしからん。あれはよくないという自分の意見をもつていたら、安保健案のいろいろなことが頭に入ってくる。何も考えずに自分の意見なしに安保健案について考えなさい、知識をまとめなさいといわれても、まとめられるはずがない。安保健案はけしからんと思つて、よく調べているうちに、いやいや、安保健案は必要ではないかと思つたら、それはそれでいいと思います。

自分のまず意見というのがあつてこそ物事にコミットできる。ですから、このアクティブラーニングというのは自分の意見をつくるための、自分の考えをつくるための1つの手段であつて、それさえできれば、もう経過はつまらないこと、連続でも全く構わないと思つていま

す。  
何かご質問、ご意見ありましたら、遠慮なくいつてくださるとありがたいですけれども、いかがでしょうか。

○参加者 大変有意義なご講演ありがとうございました。我々教員は、アクティブラーニングに対してどう成績をつければいいのかというところが非常に悩ましいのですが、先ほど先生は意見を出してくれば加点だというようにおっしゃつていたのですけれども、いい意見も全て褒めるということであれば、意見がいいから加点をすとか、いい成績をあげるとかということはないと思うのですが、いかがでしょうか。大学と高校とではまた違うと思うのですが、成績をつけなよということもまたちよつとそれだと学校の中に取り込んでいくのも難しいのかなという気もするのですが、アイデア等があれば、教えていただきたいのですが。

○樋口 先ほど先生方に判定していただいたのですけれども、それを点数に加えています。1位、2位、3位、4位と毎回決めます。それに加えて、大学でそういうことをやるのは恥ずかしいのですけれども、紙切れを渡すのです。本当は、小学校か中学でやることだと思つてですが、発言したりすると紙切れを渡し

て、その紙切れが何枚か集まると加点、点が変わるというシステムにしておりまして、とりあえず何でもいから、どんなにレベルが低くても何か発言したら紙をあげると。いい発言、おもしろい発言だったらもう1枚あげる。これも判定者としての教員の特権だと思います。主観になつてしまうのですが、笑点の大喜利のあれと同じです。おもしろくても、それは俺の悪口だからゼロとか、取り上げるとか、それで全く構わないと思います。エンターテインメントとしての授業でちよつとも構わないと思います。ただ点をつけるのでしたら、教員が持ち点をもつていて、点をたくさんとつた人に点をあげる。それでいいのではないかと思つています。ただ、それも客観的な点ではありませんけれども、それはそれでいいのではないかと思つたのです。もちろん中学、高校と大学は違いますので、先生方にそのままの形で採用していただく必要はないかもしれませんが、私はそうやっていていいことをちよつと参考にしていただけるとうれしいです。

○参加者 実際にやってみておもしろかった部分も多かったのですが、これをカリキュラムの中に取り組んでいくとなると教科書との兼ね合い等も出てきます。単元学習でこういったことを取り入れるのは

とても楽しいですし、文化祭等で何かクラスの企画をやる際にはとても有意義だと思っておりますが、実際に学校の授業のカリキュラムに取り組み際にどのように工夫したらいいのか、もしアイデア等がありましたら教えていただきたいと思っております。

○樋口 大変申しわけないですけれども、それは学校によって違うと思いますし、高校の制度を余り余り知りませんので答えられないのですが、例えば小論文指導の形でございますと、ゆとり教育のときに取り入れられた総合の時間に、何回かのうち1回にて、小論文指導を行いました、クリティカル・シンキングという学研と一緒に作っている教材を使ったりしてくださっている学校があります。それから、ホームルームの時間に時々使ってくださいというところもあるようです。ただ、先ほどいいましたように私としまして、中学、高校について、小論文指導は行っていますけれども、そういう組織については全く不案内ですので、それはちょっと答える資格がありません。申しわけありません。

○参加者 1点伺いたいのは、大学と違いまして、やはり1コマが50分という限られた時間の中で、例えば授業の2回に1回とか、3回に1回この形を取り入れていつているのですが、進んでいく過程の時間との方がなかなか難しく、2回、3回かけて最終的なところまでいかなければいけないというところがあつたんですね。その時間に関してもアドバイスいただけたらと思っております。

○樋口 先ほど配りました紙の2ページ目、3ページ目、この欄ですね。これは宿題にできるものかと思っております。家で何項目以上全部書いておいてという形で強制して、一番肝心なところを30分ぐらいで話し合せて、残りの20分ぐらいで発表させるという形をとるのが理想なのではないかと思っております。ですから、宿題にできることはなるべく宿題にすることです。家で調べるということとは結構大きなことで、歴史性、地理性ということろは、海外でどうしているかなどをネットで調べたり、もしくは親に以前はどうだったのかを聞いてみるなりするなり、そういう家庭での作業に適した部分だと思います。それから、親は、お父さんが多いかもしれませんが、基本的に仕事でこういうことをしているはずですので、親と子の交流にも、こんなおもしろいことをやっているのだからという紹介にもなつて、いいのではないかと思っております。昔と違うねとい

う感じになるのではないかと思つたので、ぜひ宿題という形をとつていただければと思いますけれども、いかがでしょうか。

○参加者 先生がおっしゃつていたように宿題の形をとらせていただいております。プレゼンの方法もさまざまなのをだんだん慣れてくると生徒が展開するようになつてくるのですが、きょう実はお聞きしたかったのは、最終的な発信の部分と勉強させていただけたらと思つたので、また次の機会にこの部分をいっばい教えていただけたいと思つております。

○樋口 わかりました。発信は小論文でそれを基本的に得意としておりますので、きょうはむしろその前の段階を中心に話したので、もし機会がありましたら発信中心にお話したいと思つております。

時間になりましたので、まとめをしたいと思います。先ほどやつていただいたのがまさにアクティブラーニングです。先生方に楽しんでいただけたのと同じように、生徒たちも楽しんで、いろいろなアイデアを出す。とりあえずみんながにぎやかに。それがアクティブラーニングの目標だと、目的だと思つております。自己目的化していい。それ以上求める必要は必ずしもないと私自身は思つております。成績をつける

際にも少し何か試験のようなことをする必要はあるかもしれないけれども、とりあえずにぎやかにみんながアイデアを出し合うということが何よりも大事なことだと思つております。

アクティブラーニングは、これから先にこのままほうっておくと、かつてのゆとり教育のように、なま崩し的によくないことになつてしまつておそれがあるので、やはりシステム化して、ある程度マニュアル化して広めていくべきだと考えています。マニュアル化と言つても、形式は1つである必要はありません。いろいろな先生方がいろいろな形でマニュアル化をして、それぞれのくさんの方法論があつていいと思つております。幾つもの方法論を確立することがこれから大事なのではないのでしょうか。そうすることによってアクティブラーニングがもっと一般化して、もっと教育そのものが活発化して、教育のあり方が変わる1つの要因になり得るだろうと思つております。

及ばずながら、私自身もできるだけのことはしたいと思つておりますけれども、何よりもやはり先生方のふだんの実践に全てがかかつていふと思つておりますので、もし何かうまい方法を編み出したり、実際になさつ

ていたりしたら、ぜひ教えていただき、見学に行きたいと思っております。

今日、私としては教えるというよりも、1つのモデルを示して先生方のご意見を聞き、アクティブラーニングのこれからの発展について私も考えてみたいと思つて、そのためにお話いたしました。そのつもりでありますので、よろしくお願ひします。どうもありがとうございます。

○司会者 樋口先生、ありがとうございます。最初の講演を拝聴しているときの雰囲気とは打つて変わつて、アクティブラーニングを体験しているときの皆様が本当に熱心に討論している姿がとても印象的でした。学校のほうでもまだいろいろアクティブラーニングについて研究せねばならないとも思いますが、今回の講演が皆様のお役に立てればと思います。  
それでは最後に、樋口先生に盛大な拍手をお願いします。  
(満場拍手)



平成二十八年度  
文系教科研究会(国語)委員

委員長 畑澤 正一 大森学園  
副委員長 星野 真人 國學院  
委員 二俣 潤也 京華女子  
小林 公 かえつ有明

河瀬 智子 東京農大一  
金井 利浩 中央大学附属  
研究所担当 岡沢 浩  
溝口 泰介

平成二十八年度

文系教科研究会(国語)事業

○四月十二日(火)

文系教科研究会 合同委員会

・平成二十八年度事業計画について

○六月二十四日(金)

研修会

「中島敦『山月記』論をつくろう！  
〜アクティブラーニング実践  
ワークショップ〜」

講師 中央大学杉並高等学校  
八十八名参加

齋藤 祐 先生

運営委員 金井 利浩

委員会(研修会終了後)

・平成二十八年度事業実施について

「漱石没後百年に『こころ』の「心」  
を考える」

百四十七名参加

講師 早稲田大学教授

石原 千秋 先生

運営委員 星野 真人

委員会(講演会終了後)

・授業研究会について

○二十九年三月二十一日(火)

授業研究会

「小説読解の方略を学ぶ協働学習」

開成中学・高等学校

森 大徳 先生

「アクティブラーニングで夏目漱石

『こころ』を読む」

中央大学杉並高等学校

齋藤 祐 先生

百十五名参加

講師 大妻女子大学准教授

五味 典嗣 先生

運営委員 金井 利浩

委員会(授業研究会終了後)

・平成二十九年事業計画について

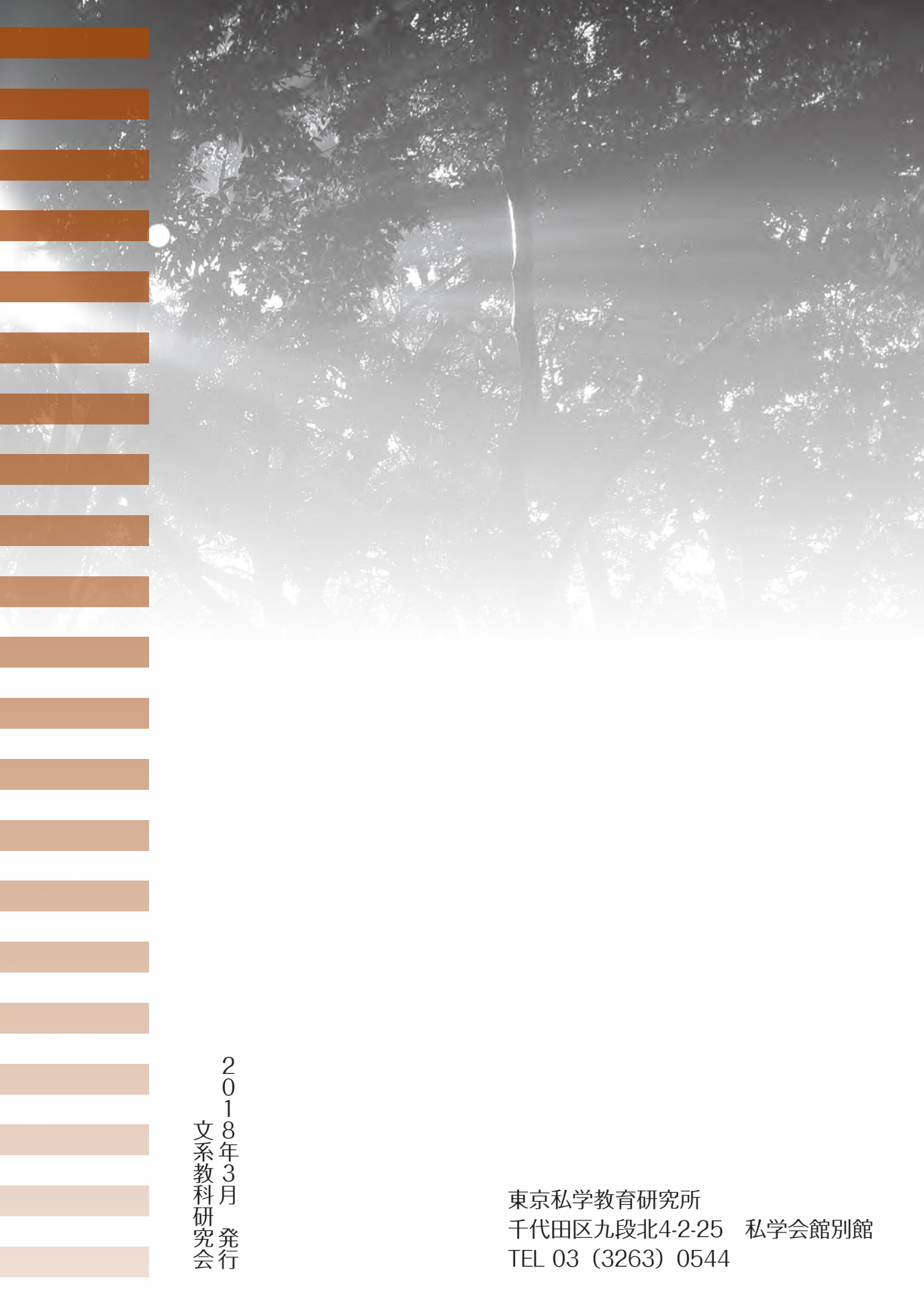
○三十年

資料発行

「国語ニュース 第三十六号」

※本国語ニュース掲載の全部又は一部  
を無断で複写・転載することを禁  
じます。

○十一月十一日(金)  
講演会



2018年3月 発行  
文系教科研究会

東京私学教育研究所  
千代田区九段北4-2-25 私学会館別館  
TEL 03 (3263) 0544